

- 動物ではサイ、トラ、クマ、イノシシ等北方系のもの、東洋象、野牛、水牛等南方系の暖帯性のものもいた。
- 日本各地に火山の爆発や陥没など活発な地殻の変動があいついで起こった。
- 気候は比較的温暖でカヤ、ヤマモモ、カシ、サザンカ、モモ等が茂り、前の東洋象に代わってナウマン象の群が住むようになった。
- 後半は第三氷期に入り、気候は再び寒冷となり、動物群も北方系へ代わった。
- 洪積世後期(二万年——一五万年前)
  - 前半は第三間氷期で、日本周辺も海進が始まり、次第に大陸から分離し始めた。琉球列島が島として孤立化したのもこのころである。このころ日本ではナウマン象が物すごく繁殖した。
  - 後半はウルム最盛期で、日本でも日本アルプスや日高山脈に氷河が発達し、又氷期の海面低下は大きくなり、前の時期に開いた海峡は再び閉じて、大陸地域と日本列島の諸島とは再び陸続きとなった。
  - コメツガやチョウセンゴヨウ等の寒冷性樹林の中に、背の高さ四メートル半もあるマンモス象の姿もみられるようになった。又現在は日本にいないがヒグマ、オオカミ、ヒョウ、ヤマネコ等もいたという。
  - このころ日本全土においても、火山の爆発に伴う火山灰の降下があり、それが堆積してローム層(赤土層)を作った。そしてこのローム層の中に、日本旧石器時代の遺物が封じ込められていたということは、このころまでに日本列島にも人類の生活が始まったと言えるのではなからうか。

## 二、人類の出現

氷河に明け暮れた洪積世という第四紀に、哺乳類の進化の頂点として人類が誕生したという。

- アウストラロピテクス猿人Ⅱ大正十四年(一九二五)アフリカで発見された化石が人類の中でいちばん古く、猿と人間との中間のものであるが、石を割って石器を造る知恵があり、これをアウストラロピテクス(南の猿の意)と呼んでいる。
- 原人Ⅱ続いて少し新しいものにジャワ原人、北京原人というのがあり、これらは約五十万年前に生存したもので、もち論石や骨で作った道具を使い火も使っていた。このころから「ことば」を使っていたと考えられている。
- ネアンデルタール人Ⅱ原人の次に出てくるもので、ヨーロッパや中央アジアや北アフリカ等に住んでいたもので十数万年前のものである。猫背でがにまたの人類で、りっぱな石器を使って狩をしていた。
- クロマニヨン人Ⅱ約五万年から一万年前に広くヨーロッパに住み、現在の人類とほぼ同じで、主として洞窟内に住み、洞窟の壁や天井に狩りの成功を祈って動物の絵をかいた。一方アジア、殊に日本列島にはホモ・サピエンスと呼ばれる人類が住んでいた。

### ● 日本の原人

人類が日本に住みついていたのは、今からおよそ三十数万年前とも十数万年前とも言われ、現在のところ明確でないが、いずれにしても日本各地から発見される旧石器によって、洪積世の時代に人類が住んでいたことはたしかである。従来日本では一万年前からいから人類が住んでいたと考えられるのが普通であったが、昭和二十四年(一九四九)、行商の一青年が群馬県岩宿のローム層から旧石器時代の石器を発

見した。(このことは後述する)これを手掛りに各地で発掘が進み、かつて日本に住んでいた人類の歴史は一挙に十万年から三十万年にさかのぼるようになるように考えられてきたのである。

三十万、四十万年前と言えば、日本各地に火山の爆発や地殻の変動が起こったが、第一間氷期のころは温暖だったため、ナウマン象を代表とする動物群が大陸と地続きの日本へ続々とやってきた。それを追って原人もやってきたとも考えられているが、洪積世末期に起こった寒期、隆起陥没、褶曲等の地殻の大変動によって、動物も原人もことごとく死滅したといわれている。

その後、つまり二、三万年前ごろになってホモ・サピエンス(知識を持つ人の意)と呼ばれる人類が、食物を求めてこの日本列島に渡来したものである。

※原人やホモ・サピエンスの使っていた石器は発見されても、そのものの化石は発見されなかったが、昭和二十五年から三十三年にかけて各地で発掘が進み、昭和三十二年(一九五九)には愛知県豊橋市牛川町の石灰岩採石場から女性の上腕骨の化石が発見され(牛川化石人)翌三十三年、浜名湖の北岸の引佐(いなさ)郡三ヶ日(みつかび)町の石灰岩採石場から人骨七片が発見され、又栃木県葛生(くずう)町の石灰岩地帯から多数の人骨化石が発見された。これらの人骨はヨーロッパの第二間氷期に住んでいたネアンデルタール人に類似していると考えられている。牛川化石人を復元すると身長約百三十五センチの成人女性となり、もしこれが当時の普通人とすれば現代の女性より大分低いことになる。男の場合も同様極めて背丈の低い人類とされている。このことから考えると、日本民族は高千穂の峰に天下ったものではなく人類出現と同時に縄文文化を生み出したものではないと言えるのではないだろうか。

### 三、先土器時代

この時代は氷河時代とも言われることは前に述べたが、氷河期の終わりごろには津軽、朝鮮海峡ができて日本は完全な島国になった。それから数万年後日本全土の火山活動が始まった。九州では阿蘇、霧島、雲仙、多良岳等の火山が猛烈に火を噴いたのは今からおよそ三万三千年前という。佐賀県東部地域で今でも地下五、六メートル付近から出る軽石は阿蘇熔岩の一種と言われている。

日本最古の文化は新石器時代(沖積世)に始まるとされ、それ以前の旧石器時代の日本には、人類は住んでいなかったというのが、昭和二十四年までの学会の定説であった。それは縄文時代の遺跡や遺物はローム層の上をおおう黒土の中のみ発見されていたからである。このローム層は洪積世に火山が噴火した時に降ってきた火山灰が堆積したもので、このような火山灰の降り積もるなかでは、人類はもち論動物も住めなかったと考えられてきた。

ところが、昭和二十四年夏、行商のかたわら独学で考古学の研究に情熱を傾けていた相沢忠洋という一青年が、群馬県新田郡笠懸村岩宿の切通しになったがけのローム層から黒曜石の槍先形石器を発見した。この旧石器時代遺跡「岩宿」の発見をきっかけに、これまで見過されていた縄文初期のものが包含されている層より更に下層のローム層まで掘り下げて発掘調査が行われるようになった。その結果、北は北海道から南は九州まで土器を伴わない石器だけを出す遺跡が次々と発見され、その数は千以上といわれている。又こういう石器を使用した人骨の化石も続々発見された。